

Q

先天性風しん症候群の赤ちゃんが、例年より多く生まれたというニュースをみましたが、どんな病気なのでしょうか？

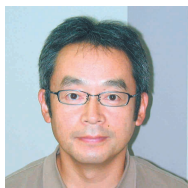
A

昨年、全国的に風しんの流行がありました。その結果として、先天性風しん症候群(CRSと略す)の赤ちゃんが全国で31例生まれたとの報道がありました。その後郡山市からも報告があり、今後まだ増えると思われます。

CRSとはこんな病気です。妊娠した女性が妊娠の初期に風しんに感染すると、感染がお母さんのおなかの中にいる胎児にも影響を及ぼし、異常をきたす状態をCRSといいます。その頻度は、感染した時期により異なってきます。妊娠1カ月で50%以上、2カ月で35%、3カ月で18%、4カ月で8%という具合です。CRSの症状は、目の異常(白内障、緑内障)、心臓の病気、難聴、精神発達の遅れなどです。

過去には1965年沖縄県で風しんが大流行した際、408人のCRSの子どもが生まれました。白内障、心臓の手術が数多く行われ、難聴の子どものために聾学校が新設されたというエピソードが残っています。

CRSを予防するためには、あたりまえですが妊娠した女性が風しんに罹らないことです。これには、妊娠を希望される女性が、ご自身の風しん抗体価を把握し、抗体が充分でない場合はワクチンを受けて免疫をつけておかなければなりません。さらに社会全体で風しんの流行を防ぐ必要があります。風しんの抗体を持たない、つまりいつ風しんに罹ってもおかしくない人を減らさなければなりません。郡山市では今後妊娠を予定している女性と現在妊娠している女性の夫を対象に、風しんワクチン接種費用の一部助成と風しん抗体価検査費用の助成を行っています。



お答え
むかわクリニック
院長 務川 靖 先生

雑記

1歳と就学前に行う2回の麻しん風しんワクチンの定期接種の接種率を上げ、麻しん風しんのない世界を実現したいものです。